

ごあいさつ

延元三年、菊池武重公の寄進により聖護寺が開創されてから、丁度今年六百五十年という記念すべき年を迎えた訳ですが、六百年もの間湮滅していた古蹟が復活され、此処に古風を志慕し、報恩の行持がこのように勤められることは、誠に法の幸いであり、好因縁にめぐりあえたことを、皆さまとともに感謝いたし欣慶に堪えないところであります。

憶えば六百五十年の昔、大智禪師が戦乱激動の世に、深山禅寂の境をこの地にもとめられ、僅か二十年の山居ではありましたが、此処に比類ない尊い行持の足跡を残されましたことは、実に感慨深いところであり、更に、五十年前に村上素道老師がその古蹟を顕彰復興され、大いに祖風を宣揚されたことは筆舌に尽し難い偉業であります。

拙衲は、素道老師の法嗣でその遺志を継承貫徹された鈴木素田師の辱知を蒙り、昭和四十年、はじめて大智禪師の六百回大遠忌法要（併せて素道老師の一周忌修行）に拝登ご随喜申しあげ、鳳山の風光に浴した次第であります。

顧れば不思議な因縁という以外はありませんが、昭和四十八年十二月、素田老師、老師と申しあげるには余りも早い五十八才で突然遷化され、拙衲はそれ以来、後継者が出来るまでという約束でこの聖護寺の守塔として任を受け、今日に至りました。無責任の誹りはまぬがれませんが、後継者はえられず、春秋の法要にのみ登るといふ状態で愚図々々遷延して参りました。

等身大という素晴らしい開山大智禪師の御尊像を拝するにつけても、又、由緒ある奈良薬師寺の仏足石を勧請せられ、稀れにみる高大な宝篋印塔を造立せられた所以を拝するにつけても、素道・素田両老師が復興されようと企図せられた聖護寺の境域・伽藍の規模が如何なる程度のものであったのか、所謂聖護寺完成図なるものが、残念ながら拙衲には判っておりません。

しかし、ともあれ現在は、聖護寺護持会の皆様の御諒解と御尽力を戴き、瑞応寺僧堂の別堂として、特に遠く外国から瑞応寺僧堂に安居を希望する人達のための道場とすべく、一昨年（昭和六十一年）三月から修行僧を安居せしめ、今日に至っております。

このことの切っ掛けは、先年（昭和六十年初秋）拙衲が、アメリカに於いて既に二十五年間開教に従事しておられる、ミネソタ禅センター主管片桐大忍老師の請によりミネソ

々に赴錫し禅会を唱導した事によります。現在、世界中の人達が参禅を希^{ねが}っていることは周知のことであり、特にわが道元禅師の坐禅を求めて、坐る生活習慣のない人達が、足を痛めながらも熱心に坐ろうとし、又事実真剣に坐っている、それは何故か。我々は此処に覚め、これ等の人達の期待に応えるためにも、宗門の人達はもつと心を開かなければならぬのではないかと思います。

このようなことを、その年の秋の法要の際お話ししましたところ、関係各位の絶大なるご賛同を得てその方向にすすめて来た次第であります。ここに開創六百五十年の記念事業として、御開山堂及び僧堂（衆寮）等を建設する運びになりましたことは望外の喜びであります。五月二十二日、菊池市の皆様は勿論、熊本県内外の素道・素田両老師につながる全国の有志百余名の方々が挙って発起人となつていよいよ着工することになりました。

新居浜市・瑞応寺関係の人達も、他人事でないと協賛して戴き、実に感謝感激であります。

片上修氏は、安岡正篤先生の門下生として、生前の鈴木素田師と格別の親交があり、既に昭和五十四年に上梓された「素田和尚遺稿」でも知られるように聖護寺を敬慕して

毎年参詣せられ道風に帰依しておられ、また、益友会、瑞応寺参禅会等を主導しておられる熱心な居士でもあります。此の度、労を厭わず、聖護寺の法要記念に小冊子を思いたたれました。

内容は、大智禅師鳳山八首の偈頌・十二時法語について「銀杏」紙上に連載した断片を纏めていただいたものであり、それに菊池市教育委員会から出された「大智禅師と聖護寺」という案内書を抜粋したものを加えたものであります。

拙稿としては誠に恐縮千万に存するものでありますが、氏のご温情ご熱意に対して深甚の感謝を申し上げるとともに奉讃のための一助ともなれば幸甚に存じ、お願い申し上げます。

なお、万般に犬馬の労をとって終始して呉れた英純光和尚に一言謝意を附記してご挨拶いたします。

合掌

昭和六十三年四月下浣

昭和六十三年五月二十二日、聖護寺開創六百五十年奉讃の法会が開催され、次いで懸案の国際禅道場をその記念事業として建立するという発起人会、並びに建立委員会が結集されました。

爾来、各方面からの格別の御尽力を頂きここに四年の歳月を経て、漸く所期の計画を達成する運びにいたしました。

即ち、まず本堂屋根の葺替え改修と境内の拡張造成工事、御開山堂の新築と老朽した光暉庵の移転新築工事、そして僧堂・衆寮の新築等、それに付随する諸工事は、この万般不如意の聖護寺としては法外な大事業でありましたが、それ等が順次恙なく進捗して今日まで参りましたことは何とも有難いことであります。

さて当初の昭和六十三年五月二十二日の吉辰に発刊された「こころの旅路・大智禅師山居の郷」が大変な好評では非増版をとの要望でありましたので、今回僧堂開単の吉辰を迎え、俄に再版することになりました。

就いては内容の一部を差し替えて、横溝光暉先生の「大智禅師尊像由来記」を掲載させていただくことになり、尚、四、五年も経過して状況も変化したので、少し書き改めたい箇所もありますが時間的にその余裕もないのでその儘に見送ることにいたします。

これ等の編著のすべての御労作は従来通り片上修居士の御道情によるもので実に感謝に堪えない次第であります。

今回の僧堂開単を契機として、大智禅師の勝蹟、鳳儀山聖護寺が各方面の御理解と御協力を戴き、これによつて今後も無事運営維持せられ、報恩の弁道が行持せられることを念じてやみません。

平成四年五月初吉辰

鳳山看青室にて 檀 崎 一 光